

後村上天皇の御代、興良親王は鎌倉の賊兵の難を逃れて、石上寺院に隠れていたが、この朝の勢強く、ここにも隠れている事が出来ず、非常に御苦慮されて居たのを畏れ奉って、陸奥の人、江花丹後清常、攝津の人、森田縫殿亮春胤、大和の人、二瓶弥次郎、祠官、和田因幡守の四人の者がお供となって、王の姿を僧として御名を常満と改め、お供の四人も、また僧となって、おのおの笈を背負って、中に石上大明神の御分靈を安置して、前立は御本地仏地藏尊を現して、賊害を避け、当国に御下向を進め奉った。丹後の故郷、江花の離れ山の頂に祠を建て、石神大明神と崇め奉った。山の名を大和沢山と呼び、その麓に御殿を新築し、側に一寺を造営して、大和山常満寺と称した。石神大明神の別当として和田因幡守を神主とした。

丹後は立石山の麓に、館を築き、「江花館」或いは「丹後館」と呼んでいる。北朝、足利氏の軍勢に攻撃され、森田、二瓶両氏は戦死し、王も又死去したという。丹後も又会津に去ったといわれる。

今も旧跡を寺と呼んでいる。昔ながらの清水が流れ、王が作ったという南御作田、北御作田が残っている。御所跡、閑居御所、塚もあったというが、わからない。寺の門口に、清常の植えた大椿も今は枯れて、椿畑の名だけが残っている。

石上神社は、永禄年間に屋敷の中の森に遷した。現在は石上布留神社と呼んでいる。

森田、二瓶、和田の子孫は上江花に残っている。江花丹後の子孫は、立石と名乗り、天栄村に住むという。